

## 68 髭男の親指解説なき解説は意味がない

### 聖マタイの召命

2024

真鍋友範

#### 1 現代人は、カラヴァッジョ絵画の真の価値を理解しているのか。

まず、17世紀イタリアの美術史家であったベッローリは、カラヴァッジョの絵画について、伝統的な絵画技法を破壊し、デッサンを事前に描かない画家としてのカラヴァッジョを全否定していた。

例を挙げるなら、《聖マタイの召命》では、まるで居酒屋の場面のように、カラヴァッジョの表現に対し、下品な絵画と断定していた。

しかし、よく見ると、窓格子の十字は、明らかにイエスを象徴しているし、何も無いと思われた上部に空間には、高窓から差し込む太陽光に紛れて父なる神からの啓示の光が差し込み、マタイの頭頂部を点光で照らしてイエスの召命行動を導いている。



《聖マタイの召命》1600カラヴァッジョ

\* 立ったままの髭男の親指に注目。

カラヴァッジョの革新的動態表現は、当時の人にとっては、動画(動く画面)そのものに思われたのだ。

その理由とは、【観者の順追った画面読み込みが進行につれて、動画のようにストーリーが進行するという仕掛け】が込められていた。

いわば、現代なら動画の世界なのだ。

《聖マタイの召命》では、まず【質問する髭の男の人差し指に先行して、質問するヒゲの男の親指から読み取る必要がある】。

大多数の現代の鑑賞者は、上記重要部分を見落としている。(図版の赤丸部分)

この事実により、鑑賞者は、ストーリー解析の最初の一歩につまずくのだ。

結果として、髭の男の指さしは、当人なのか、それとも第三者である人物か、といった方向になる。

現在の誤謬解説の二つ(イタリア説、ドイツ説)は、共にこの間違いから出発しているのだ。

イタリア説(ローマ・カトリック教会公式説)では、【髭の男の指先は横を向いていても、あくまで髭の男自身を指差している。】

ドイツ説では、髭の男の隣の男への指先は【若い収税人を指差しているように見える】(\*Wikipedia 2024)だ。

そうなのだ。【両説共に、親指は完全無視のスルー状態だ。】

つまり、【絵画では最も目立つ中央付近にいる登場人物の身体動作が、全く正しく認識されていないのだ。】

髭男の質問動作こそ、イエスの回答動作につながるというのに、なぜそうなったのか。

この物語の出発点を、イエスの不鮮明な指差し動作であると誤認識したからだ。

これは、大間違いだ、指差し動作ではなく、回転動作だ。

では、最初に間違えた美術史学者は誰か。

16から17世紀のイタリアの美術史家ベッローリに行き着く。

【400年間、ベッローリの追随者たちは、髭の男の親指を無視し続けたのだ。】  
従順なカトリック信者は、当然、それを盲目的に信じてきたのだろう。

1980年代のプロテスタント主流のドイツから出された異論など、ローマ・カトリック教会としては、無視したくなるのだろう。今だ髭の男マタイ説に囚われている。

結論として、両者ともに真実の解説ではないのだ。

## 2 究極の真実 親指から始まる解説

収税所の（窓を通して）マタイを見たイエス一行は、玄関側に回り、収税所のドアを開けた。

突然のイエス一行の入室と視線を感じた納税者の一人であるヒゲの男は、イエスに向かって二段階の身体動作で質問した。

『お探しの人は、私ですか、それとも、隣のメガネの収税人ですか』

【親指をヒゲ男自身の胸に向け、続けて人差し指を隣のメガネの男に向けた】

質問を受けたイエスは、左手を開いてヒゲの男に掌を見せ、質問を受容する意思を伝えた。

次に一歩左側に右足を踏み出して、自身の視点を横に50センチほど移動させ、呼び出し対象者（マタイ）の顔が見える位置腕あるに移動した。

そうして、三段階目の身体動作として、右腕を廻して、向こう側の人物を呼んだ。

その瞬間、（収税所の西側の高窓からは、この時父成る神からの一条の光が、マタイの頭頂部の点光となり、イエスを導いた。）

イエスは眼鏡の収税人を呼び出した。『私に従いなさい』

この言葉を聞いたマタイは、即座にイエスの手の仕草と視線から、自分が呼ばれたと理解し、机に手を置いた姿勢から、体を起こし、立ち上がり（注：椅子から立ち上がり、と聖書は書いていない）、疑いもなく無言でイエス一行に従った。

